

特別講演要旨

マードックとシェイクスピア

岡本靖正

The Black Prince と *The Sea, the Sea* はそれぞれ *Hamlet* と *The Tempest* を踏まえているが、Murdoch (以下 M) は、インタビューでも、道徳哲学の著作でも、繰り返し Shakespeare (以下 Sh) に言及している。M にとって Sh はどのような存在だったのか。

インタビューでは何人かの聴き手から影響を受けた作家を訊ねられて、Tolstoy や Henry James 等とともに、と言うよりむしろ筆頭に Sh と Homer の名を挙げている。「創作中は、影響が

あってほしいと願ってどちらかを読んでいます。Sh には小説家が必要とするすべてのものがあります。魔術、プロット、人物たち、構成。」あるいは「芸術は形式を持たなければならない。…他方で、特に小説は…閉ざされた構造の中で、自由な存在を描くことができる。Sh を見てご覧下さい。Sh は小説の王様 (the king of the novel) です。」

こうした判断の根底には、*Sartre: Romantic Rationalist* にすでに示されていた小説家・道徳

哲学者としての M の現実観と人間観がある。「Sartre は、本来の小説家にとっては致命的なことであるが、人間生活を作り上げているものに我慢がならない。彼は、一方で、現代生活の細部に生き生きとした、しばしば病的なまでの関心を抱いており、もう一方で、それを分析し、知性を満足させる図式やパタンを組み立てようとする情熱的な願望を持っている。しかし、これら二つの才能を融合させて大小説家の作品たらしめ得る特徴、すなわち人間および人間の相互関係は不条理で還元不可能なそれぞれ唯一無二のものである」ということの理解が欠けている。」「本来の小説家」は、「われわれのなすべきことではなく、われわれのなすありのままを凝視」する「一種の現象学者」であり、哲学者には困難な「合理主義からの自由」を天賦の才能として恵まれていて、それによって「しばしば哲学者の発見を先取りしてきた」。

M はロマン主義的人間観の源流をカントに見ている（以下の引用の多くは“The Sublime and the Beautiful Revisited”から）。「カントの道徳哲学を支えているのは徳=自由=理性という等式である。徳は何かを認識することではない。それはむしろ理性的秩序を課す能力である。われわれは他人を、個別的でエクセントリックな現象的人間としてではなく、同等に普遍的理性を持った人間として尊敬する。」しかしカントにとって、情緒と欲望は倫理とは無関係であり、「われわれは情緒と欲望の混沌とした曖昧な領域から選択と行為の疑問の余地なき明晰へと向かう」。

現実を歴史的・心理的概念の領域（理性的自己意識）の拡大と見たヘーゲルにとっては、理性は「知の円環を閉じる力を持ったもの」であり、現実を完全に知り尽くすことが可能である。カントにとっては徳は認識の問題ではなかったが、ヘーゲルは「進歩が自己意識の増大を尺度にして測られるという意味で認識の観点から徳を考えた。徳はまた必然の過程の認識という意味で自由でもあった。すなわち自己意識としての自由である。」「カンにとって徳=自由=理性的秩序である」とすれば、「ヘーゲルにとっては徳=自由=自己認識である」。しかし現実の現象的な人間は情緒と

欲望の混沌から逃れることはあり得ず、したがって全くは理性的でないとするれば、実践理性は不透明な世界に立たされていることになり、もはや人間は全く自由ではない。言いかえれば、理性は自己を超えたもの（他者）に取り囲まれているわけであり、ここでは、理性が自由を獲得するためには、何よりもまず他者の認識が問題となってくる。さらに、M にとっては、エクセントリックな他人の存在は、自己内部の他者にも増して一層深い闇として理性の前に立ち塞がる。したがって、M がカントとヘーゲルの道徳哲学を支える等式を立てた流儀にならえば、M のそれは、自己の内部と外部の他者を含めて、「徳=自由=他者認識」ということになる。

ヘーゲルの哲学は他者の存在を許さないところに成立する。一切は究極的には理性的自己認識の中に取り込まれ、知の円環は閉じられる。しかし M にとっては、他者はついに完全にはとらえられることなく、知の円環は永遠に閉じられず、認識の地平は無限に後退してゆく。これは、人間は他者（超越的現実）の認識の度合いに応じて自由を獲得するということである。ここには「自由の度合い」というものが存在することになる。

超越的現実が不条理で不透明な闇であるとするれば、それを認識するのに重要なのは想像力である。想像活動は何かを理解しようとするときに日常最も多く行っている活動でもある。想像力は常に「幻想（悪しき想像力）」に墮す危険をはらんでおり、実際われわれはあらゆる種類の幻想にとらわれていて、現実（他者）を認識すること（自由）が困難になるが、しかし現実を認識することを可能にするのもまた他ならぬ想像力である。作家が想像力によってその作品世界に作者自身とは全く別の人物（他人）を描き得ているとするれば、それは他人を理解し得ていることに他ならない。その意味で、最も優れた作家は最も自由（=有徳の人）である。「芸術家は実際善なる人の類比物であり、特別の意味で善なる人、つまり、自己を空しくし、自己を通して他者を存在させしめる愛の人である。」かくして Shこそは最も自由な、最大の愛の人である。これが M にとっての Shであったと思う。